

漁場環境から見える今後のノリ養殖

浅海干潟研究部 研究主任 松尾 竜生

熊本県のノリ養殖業は、生産額がおよそ 100 億円で本県海面漁業生産額の 4 分の 1 を占める重要な漁業です。ところが近年、地球温暖化の影響もあるのでしょうか、漁期中の水温が以前に比べて高くなる傾向にあり、その持続的で安定的な生産の障害となる事態が見受けられるようになってきました。

まず、ノリ漁期のスタートとなる秋の採苗期に水温が高く、その後の育苗期も下がりにくくなってきたことです(図1)。例えば、平成20年度漁期は、23℃程度で採苗されましたが、その後の水温低下が順調ではなく23℃で停滞したため、健全なノリ芽を育てることが難しい漁期でした。

次に、高水温化による漁期の短縮化です。従来通りの養殖方法では、今までと同程度の生産量と生

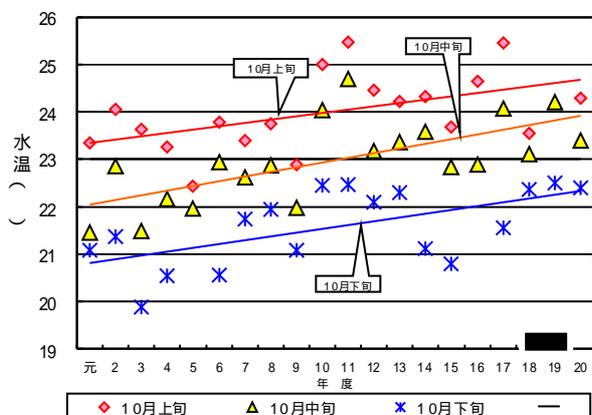


図1 平成元年以降の旬別水温の推移
(長洲沖自動観測データ)

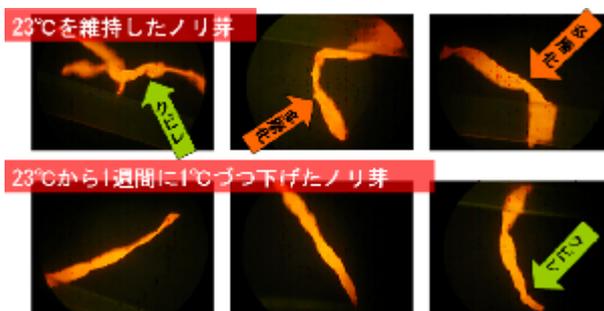


図2 各試験区におけるノリ芽の形状

産金額を確保することは困難になったと考えられます。短くなった漁期に対応したより効率的な生産方法を検討する必要が生じてきました。

そこで、高水温化傾向を示す漁場環境に対応した今後のノリ養殖方法を検討するため、育苗期間中のノリ芽の健全性について水温に着目して実験するとともに、効率的な生産方法の一つとしてノリ葉体の摘採方法(摘み取る割合)の違いによる生長性等の変化を調べました。

育苗期間中のノリ芽の健全性についての実験は、水温23℃を維持する試験区と水温23℃を1週間経過毎に1℃下げる試験区を設けてノリ芽を培養し、その形態異常(クビレ、多層化、コヨリなど)の程度を把握しました。その結果、23℃を維持した試験区では、クビレや多層化が多く認められたのに対し、1週間毎に1℃下げた試験区では、同障害が少ない傾向がありました(図2)。

ノリ葉体の摘採方法の違いによる生長性等の変化については、15cm程度に生長したノリ葉体について、葉体先端から基部にかけて6等分相当の位置5カ所で各々の葉体を切断し、その切断した葉体を培養して、葉長が15cmに達した段階で、再び所定の位置で切断、これを試験期間中繰り返しました(図3)。その結果、浅摘みは深摘みよりやや生産性が高く、摘採回数が少ない段階では黒み度が大幅に上昇しました。また、対照区のような伸ばし過ぎ(徒長)は、切れ流れが増大して生産性が落ち、品質も低下する可能性があることが解りました。

これまでの実験から、今後のノリ養殖にあっては、適水温での採苗はもちろん、育苗期の水温動向

も十分考慮して、採苗開始日を決定する必要があるようです。

また、ノリ葉体は、摘採することによって生長する力が発揮され、色調も良くなりますが、効率的なノリ養殖のためには、病害の発生など変化する漁場環境に応じた摘採を、漁場毎に集団で実施することが重要です。

当センターでは、ノリ養殖業者のみなさんを対象とした講習会などで、これまでの実験結果を踏まえて詳細に説明していきます。

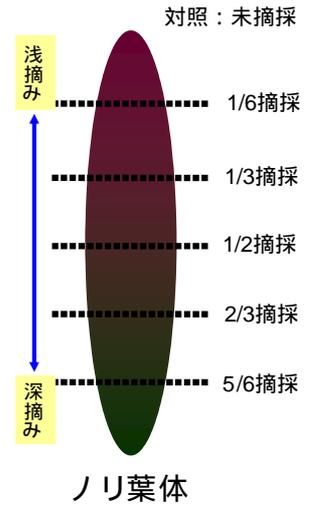


図3 ノリ葉体の摘採方法